

自ら学ぶ力を育てる授業の創造

IV 研究協議

ここでは「体育」と「アクティブ・ラーニング」という観点の協議を記載したい。

中1女子バレーボールの授業では競技者や友達のプレーを見て「カッコいい」「真似してみたい」と感じたことを試行錯誤してみる大切さを大事にし、やってみただけどうまくできない、身体操作できないときにどう試行錯誤していけばよいかということを引き出していきたいと考えている。また、「ニュースポーツをつくろう」というコンセプトで生徒たちの気づき、発見を大切に、例えば「サーブだけで決まるのはつまらない」のであれば「レシーブ側に有利なルールを考えよう」と解決方法のヒントを与えて学習支援している。ルールやゲームの進め方の工夫という点では、例えば「人数」についても新たな発想が期待できる。「コートに何人入ってプレーしてもよい」と考えたとき、「多すぎたらプレーしにくい」のであれば「適正人数はどのくらいか」という課題や「相手と同じ人数でなければいけないのだろうか」という発想による授業展開も期待できるのではないだろうか。

高II女子サッカーの授業ではゲーム観察記録をつけることで自分やチームの課題を客観的に把握、分析して課題解決方法を考え、共有させようと展開している。そのなかで課題解決につながる学習活動を実践、試行錯誤することで「わかる」を「できる」につなげようと学習支援している。サッカーはゴール型球技であるので数的優位をいかにつくるかということが学習課題のひとつとなるのでそれを引き出すための人数に差をつけた学習活動だけではなく、たとえば「コートサイズ」について、縦を短く、横を長くすることによって横への広がり生まれ、サイドをどのように使っていくかという試行錯誤につながる学習活動が期待できるのではないだろうか。

「体育」では「アクティブ・ラーニング」が定義化される以前から実質的にアクティブ・ラーニングを実践してきたが、授業者がねらいを明確にもったうえで生徒たちの「主体的な学び」「対話的な学び」を支援することで「深い学び」につなげていくことが大切であると改めて強く認識した協議となった。

最後に、広島大学大学院教育学研究科の沖原謙教授からいただいた助言について記載させていただくこととする。

生徒が主体的に、スムーズに先生の指示に従いつつ自分たちの意見を反映させながら授業を成立させている今日の公開授業はまさにアクティブ・ラーニングであろう。世の中が進歩してより多くの価値観を認めることができる世の中になってきた今日、「価値の多様化」「価値の無限化」が始まっている。答えを求めるのではなく、多様な解決方法を、その考え方を求める体育は答えが一つでなくても良いという視点から考えるとアクティブ・ラーニングに向いている教科とすることができる。違う意見、多様な価値観を尊重し、複数の選択肢の中から複数の解決方法を選択していく主体的で対話的な学習活動を通して自ら学ぶ力を育てることができるのである。その学びを成立させていく中で必要なことは5W1Hであり、いつ・誰が・何を・どこで・何のために・どのようにしたのかという観点で現象をとらえて分析して解決方法を探っていけるように支援することが教師に求められる。その前提には、何を考えさせたいのかということを確認しておくことも重要である。繰り返しになるが、体育はアクティブ・ラーニングに適している教科である。課題を発見し、その解決方法を考え、工夫し、学び合う学習活動を支援する教材や教具の工夫、そして学習活動に対する評価の在り方を今後も研究していただきたい。